

SM

補姦少年

Special Mission



SM

SM

成人向
FOR ADULT ONLY



「予約した宗野竜太郎と虎次郎です」
兄の竜太郎がホテルのフロントでチェックインを始めると、虎次郎は急いでフロント右側の奥にあるロビーに向かう。

「よし！間に合った」
ロビーを見た虎次郎はそう呟いて小さくガッツポーズを決める。

夏休みに入ってからすぐの某地方都市のビジネスホテルのロビーでは、突然現れてガッツポーズをする男子小学生に気づくことなく、他県の中学校の校名が入ったスポーツバックを持った校名入りジャージ姿の男子中学生四人がバカ話で盛り上がっていた。

「おらっ！約束通り御開帳だ！」
部活のジャージを着たイケメン男子中学生が、同じジャージを着た少年に背後から抱き着いてパンツを下ろそうとする。

「つてめ、コノお！」
抱きつかれた少年はへそと下腹を晒されながらも必死に抵抗し、周囲の同じジャージを着た少年達は呑気に笑って二人を見ている。

「間に合ったようだな」
チェックインを終えた竜太郎は、悪ふざけする男子中学生達を離れて見つめる弟の虎次郎に小声で声をかける。

「うん！おれはバレないように部屋までついていって部屋を特定するから、兄ちゃんは予定どおり準備して」

「おう。俺達の部屋はコレだ」
竜太郎は部屋番号が書かれた紙片とカードキーを虎次郎に渡すと、荷物を持ってその場を離れた。

「まさか隣の部屋って、出来杉でコワいな」
ほっと息をつきながらベッドに座った虎次郎は、苦笑しながら呟く。

虎次郎の、そして実の兄で高校生の竜太郎のターゲットは、学園中等部二年生でバドミントン部のエース、蒼乃拓弥。ロビーでチームメイトのパンツを下ろそうとしていたイケメン君だ。

虎次郎が地元のレジャーランドのプールで見かけて気に入った。竜太郎に盗撮写真を見せたところ、同じ学校のちよつとした有名人だった。

「俺とは入れ違いだけど中等部では目立ってるぜ？陽キャでイケメンなのに自信家の『オレ様』野郎で騒ぎも多いヤツだ。一度だけシャワールームで見て、顔と体は極上品だから俺も機会があれば喰いたいと思っただけど、サッカー部の俺とは接点がるで無くてな」

残念そうに言う兄に、虎次郎はキラキラした目で身を乗り出す。
「じゃあさ、無ければ作ろうよ！瞬太のトコは二人目もゲットしたって言ってた！おれらも欲しい！」

「ん？そうだな、お前もようやく精通したし、いい頃合いかな」
弟のおねだりにそう答えた竜太郎が、直後にバドミントン部の遠征試合のスケジュールを入手できたことで、あわてて追いかけてきたのだ。

「あとは真夜中に部屋で一人になるのを待って、つて兄ちゃん遅いな」
この後の展開に思いを巡らせた虎次郎は、いろいろと仕込むために出かけた兄の戻りが遅いのに気づく。

「まだ時間はあるけど、ん？あれ？」
意識を部屋の外に向けた虎次郎の耳に争うような声が聞こえた。

若い男たちがドアの向こうでワイワイと争っている！
あわててドアを開けて覗いた虎次郎の目に、隣の部屋の前で全裸のままチンポをプラプラ揺らしている蒼乃拓弥が飛び込んできた！

「ちよつ、マジでヤバいって！悪かった、謝るから！」
シャワー直後らしい全裸の拓弥は、楽しそうな顔のチームメイト二人に部屋から押し出されながら何かを必死に謝っているが、結局そのまま部屋から放り出されて部屋のドアを閉じられてしまった。

「こらっ！ざけんな！開けろお！」



さすがに青くなつて部屋のドアを叩いて叫ぶ拓弥に対して、部屋の中から何かを言い返し、それに拓弥がさらに言い返す、を三回ほど繰り返したところで突然、エレベーターホールの方から複数の賑やかな若い女の声が聞こえてくる。

「まじかっ！」

拓弥は短い悲鳴を上げて絶望した表情で固まる。

エレベーターホールは廊下の中ほどを曲がったところにあり、十秒とかからずに全裸の拓弥がいる廊下に女性客の集団が現れてしまう！

「こつち！」

しかし次の瞬間、虎次郎は拓弥の手首を強く握って引つ張り、間一髪で自分の部屋に引き入れた。

「助かった」

ドアの向こうから響き渡る賑やかな女たちの声を聞きながら、拓弥は心底安堵した声で呟いた。

慌てて閉めたドアノブを握る右手は緊張で強張ったままだ。

「ありがとうな！マジで助かったぜ」

一呼吸おいてから自分を助けた虎次郎を見て、さらにリラックスして感謝を口にする。相手が男子小学生というところで完全に警戒心を解いた様子で体を伸ばし大きく息を吐いた。

「いやあ、まいったぜ。アイツらつまんねく事で怒りやがってさ！」

緊張の解けた拓弥は、股間を隠すこともせず虎次郎にこの事態の『いいわけ』を話し始める。

要するに、拓弥の普段からのオレ様な言動や態度に不満の溜まっていたチームメイト達が、シャワー直後で全裸だった拓弥の無神経な発言をきっかけにキレて制裁発動という事らしいが、拓弥自身は自分が悪いとはまったく思っておらず、反省の色は皆無だ。

ただ、ここまでヤバい仕打ちをされたにも関わらず、チームメイト

達に本気で怒ってはいない様子なのは、人として器がデカイのか、単純にお人好しなのか、ただバカなのか。

『きつと全部なんだろうな』

虎次郎は熱弁する拓弥に適当に相槌を打ちながら内心で苦笑する。

そして視線は目の前にあるイケメン筋肉男子中学生の良く焼けた褐色の肌が艶めかしい全裸の肉体に釘付けにして、遠慮なく舐めるように視姦していく。

形の良い大胸筋に乗った左右の乳首はぶっくりと形のハッキリしたタイプで軽くツンと勃っていてエロく、綺麗に六つに割れた腹筋とへそ、さらにその下の日焼けしていないすべらかな下腹と年齢相応の柔らかそうな陰毛の造形は学校の美術室にある彫像のようだ。

さらにその陰毛の下から生えている形の良いペニス、ほぼ剥けていてピンク色の亀頭が露出し、体格を考えれば平常時でも十分に長くて太く、その下にぶら下がる陰囊は重量感のある大きな二つの睾丸の形が浮かび上がっていた。

「それで最後には『そのまま真っ裸で他のヤツの部屋に行け』って言いやがってさ！ああそうしてやるって言ったところで人が来ちゃって」

拓弥はそう言って『いいわけ』の熱弁を終えるとペロツと舌を出して楽しそうに笑った。

そして、さすがに少しは申し訳なさそうに頭を下げた頼み込む。

「そんなワケだからさ、ホテルの部屋着を貸してくれないか？」

まさに鴨ネギ、鴨がネギを背負って来る代わりに、ターゲットのイケメン筋肉少年が全裸で弱みを晒して頭を下げている！

「もちろん良いよ！ただし、二つだけお願い聞いてほしいな！」

満面の笑顔でそう即答した虎次郎に、拓弥は笑ってツッコむ。

「二つかよ！まあ、いいけどさ」

あっさり承諾した拓弥に、虎次郎は内心の歓喜を隠して畳みかける。「じゃあ一つ目は、おちんちん触らせて！あとおっぱいも！」



無邪気を装おう虎次郎の大胆な『お願い』に拓弥は少し驚いた様子だったが、少しもためらうことなく、すぐに笑いながら腰を前に突き出してチンポを虎次郎に差し出した。

「おっぱいってなんだよ。まあ、しょーがねえな、ほら！」

てっきり抵抗されると思っていた虎次郎は、自分に向けて突き出された拓弥のチンポに思考停止に陥ってフリーズしてしまったが、すぐに立ち直って『無邪気な男の子』を演じ続ける。

「へっ！ありがと！やっぱり兄ちゃんのチンポでつけー！あ、石鹼の匂いがする」

虎次郎はしゃがんで拓弥のチンポに目いっぱい顔を近づけて見る。

「うおお、思ったよりかなり恥ずかしいぞ」

拓弥はそう言いながらも楽しそうに笑っていて、そんな拓弥の反応を見た虎次郎は、思い切って一気に突っ走る決意を固めた。

「じゃあ、おちんちんは最後に取っておいて、まずはおっぱいから！」

そう言っつてニヤつと悪戯っぽく笑うと、虎次郎は立ち上がって拓弥のツンと勃起した左右の乳首を無遠慮に両手で摘まんだ。

「おおっ？」

乳首を男子小学生に摘まれてポカンとする拓弥に構わず、右手は乳首をクリクリと少し強めに觸り、左手は手のひら全体で大胸筋の形を確かめるように柔らかく揉み上げる。

「おいおい、なんか手つきがやらしくぞ」

どうやら男子小学生の悪ふざけと侮っているらしい拓弥は、少し頬を染めて苦笑しながらも虎次郎の好きにさせている。

「うん！おれえつちなコトしてる！兄ちゃんのカラダすげーよ」

そう言いながら、虎次郎はさらに左手はそのままに右手を拓弥の胸から腹に下ろして割れた腹筋の形を指でなぞっていく。

「マジのシックスパックだあ、たまんねー」

無邪気なフリも忘れて拓弥のへそに指を突っ込む。

「はうっ！」

ビクンつと反応した拓弥の股間で、いつの間にか半勃起状態になったほぼ剥けペニスもポンと跳ねた。

「うおっ、チンチンおっきくなってる！」

虎次郎は右手で拓弥の半勃起ペニスを無造作に掴むと、感触と硬さを確かめるようにゆっくり抜き始める。同時に左手で陰嚢をやさしく掴んで二つの睾丸の感触を楽しむように揉んだ。

すると拓弥のペニスは虎次郎の手の中ですぐに完全勃起してしまう。『すげー！熱くて硬くて、最高のさわり心地だ』

「おいおい！そろそろシヤレにならねえぞ！」

男子小学生の手でチンポを抜かれて完全勃起してしまった拓弥はようやく焦りはじめるが、虎次郎は手を止めることなく追い込む。

「じゃあ、二つ目のお願いだよ。このまま射精して見せてよ！」

「っえ」

ようやく事態のヤバさに気づいて絶句する拓弥に、虎次郎は拓弥のチンポを抜く手をさらに早めながら畳みかける。

「このままおれの手の中で射精するのがイヤなら、自分でオナニーして射精してもいいよ？どっちにする？」

「こんなの見て面白いのかよ？」

拓弥は全裸のままベッドの上に座り、自分のズル剥け完勃ちペニスを抜きながら困惑気味に虎次郎に尋ねる。

「うん！もちろん。おれ、この間ようやく精通したんだ。だから他人のオナニーって見てみたかった！」

「そうかよ！くっ、そろそろ出るぞ！」

「そのまま自分のおなかにぶっかけて！」

次の瞬間、拓弥の完全勃起してズル剥けになったペニスから、白い粘液が噴出して自身のシックスパックに降り注いだ。



「お！いっぱい出たな。いいじゃん！」
部屋のドアが突然開いて当然のように入ってきた若い男は、全裸オナニーをして自分の腹を濡らした精液をティッシュで一先懸命拭いていた拓弥を見て楽しそうに笑う。

「っえ」

突然出現した見知らぬ若い男に仰天して固まる拓弥に構わず、虎次郎は若い男と得意げにパンと左手を合わせた。

「兄ちゃん遅いよ！おれだけで始めちゃったぜ。でも、こんな状況でも大量射精できちゃうなんて、絶対才能あるよね！」

「そうだな。良い性奴隷になりそうだ」

兄ちゃんと呼ばれた若い男の言葉に拓弥は目を白黒させる。

「へっ？せいどれい？」

自分が何を言われているか理解できていない拓弥に、虎次郎は囁んで含めるように言い聞かせる。

「性的な奴隷で、セ、イ、ド、レ、イ！ご主人さまに命令されるままに肉体を差し出して、性的に弄ばれるヒト」

「えっ、性的って、ええ？」

ますます混乱している拓弥に、若い男こと竜太郎が穏やかな声で助け船を出すように言葉を引き取る。

「おいおい、急ぎすぎだぜ虎次郎。まずは初めましてだな、蒼乃拓弥くん。俺は宗野竜太郎、君と同じ筍学園の高等部二年だ。第三サッカ―部の主将をやってる。こっちは弟の虎次郎。初等部の六年生だ」

学校の先輩と聞いて拓弥の表情に安堵と緊張が同時に出る。

「という事で蒼乃拓弥君、俺達兄弟の性奴隷にならないか？」

「おれと同じじゃん！」

すかさず入る弟の突っ込みに兄弟そろって爆笑してから、竜太郎は『真面目に』自分たちの目的を拓弥に説明した。

このホテルには、部活の遠征で宿泊する拓弥を何らかの手段で拉致

監禁して弱みを握り、自分たちの性奴隷として契約させるために慌てて追いかけてきたこと、そのために竜太郎が様々な仕掛けを念入りに準備していたこと、にもかかわらず拓弥自身が全裸で部屋に転がり込んできたので、虎次郎が公開オナニーさせてみたこと。

「ほんと、かなり頑張ってイロイロ仕込んだのに全部ばあ！だ。」

竜太郎は本気で残念そうに口を尖らせる。

拓弥はただ茫然として言葉も出ないようだ。

「兄ちゃん乙！というワケで拓弥の全裸オナニーも盗撮してあるけどその程度じゃ脅迫材料になりそうもないから、正面からお願いするね」

虎次郎がとんでもない事を言いながら、全裸のままベッドに座っている拓弥の隣に座ると、おもむろに拓弥の右乳首を摘まむ。

「っん！」

ビクンッと反応する拓弥を見て嬉しそうに笑うと、虎次郎は拓弥の目をまっすぐ見て『おねだり』をする。

「ねえ拓弥。拓弥のこの最高のカラダが欲しいんだ。おれと兄ちゃんの性奴隷になって、このカラダで遊ばせてよ。あ、奴隷と言っても普通の日常生活は守るよ！ジンケンほちゃんとあります！」

「ジンケンってそんな」

混乱と困惑の表情でそう呟くのが精一杯らしい拓弥に竜太郎は畳みかけるように説明を付け加える。

「具体的には、週に1回か2回、お互いの都合が合う日時に君のカラダを使ってセックスしたりSMプレイをしたりする。SMはかなり過激なのをやるけど、安全は保障する。上手いんだぜ俺達。あと必要な経費は全額こちら持ちで、さらに君にも月払いで謝金を出す。金額は

これでどうかな？これを毎月払うよ」

スマホに表示された金額を見て驚いた拓弥は、金縛りが解けたように

勢い込んで叫んだ。

「えっと、いやいや、でもやっぱり嫌だよ冗談じゃない！」

「えっと、いやいや、でもやっぱり嫌だよ冗談じゃない！」



「だよね」

拓弥の拒絶の言葉に虎次郎は苦笑気味に笑うと、兄の竜太郎とアイコンタクトを取ってからスツとベットから離れた。

次の瞬間、竜太郎の右拳が拓弥の形の良いシックスパックスの腹筋にズドンとめり込む。

「っが！」

悶絶して体を折る拓弥を、竜太郎はさらに乱暴に引き起こしてからベッドにうつ伏せに叩きつけて、馬乗りになって押さえつける。

そして手際よく両手首を後ろ手で結束バンドを使って拘束し、長い棒の両端に革の輪が付いた拘束具を両膝に装着して両足をガニ股状に開いて固定した。

すっかり萎えた通常状態のペニスと金玉、そしてアナルが丸見えだ。

そこまでを最初の腹パンから一分とかわからずにやり遂げた竜太郎に、虎次郎は大喜びで拍手して囃し立てる。

「すげー！兄ちゃんすげー！さすが千人斬りのレイプキング！」

「まだ百人だ！あとレイプじゃなくて一応和姦だ！俺は犯せば和姦に落とせる自信のある男の子しか犯してないぞ」

平然と酷いことを言いながら、竜太郎はひょいと拓弥を抱き上げる。

「よいしょ！」

その瞬間、虎次郎はすかさずビニールシートを拓弥の下に敷いた。

竜太郎は再び拓弥をベットに下ろすと、大きなカバンの中からガラス製の大型の浣腸器を取り出して虎次郎に渡す。

「ほら、やってみろ」

「うん！」

既に薬液が目いっぱい入った浣腸器を受け取った虎次郎は、浣腸器の先端のキャップを外すとすぐに、拓弥のアナルに刺し入れた。

「んひい！」

ガラス製の筒を突然アナルに挿入されて、ようやく覚醒した拓弥は

奇声を上げて悶えるがほとんど身動きができない。

「な、何だコレ！え、えええ？」

パニック状態の拓弥に構わず、虎次郎は浣腸器のピストンをゆっくりと押し、拓弥の腸内に薬液を注入する。

「ああああああっ！」

下腹の中に液体が注ぎ込まれる感覚に目を泳がせながら絶叫する拓弥を、竜太郎はいつの間にか取り出したビデオカメラで撮影していく。

「ほら、ちゃんとケツの穴閉めて！」

注入し終わって浣腸器を拓弥のアナルから抜くと、虎次郎はパンと拓弥の尻を叩く。しかし、ぴゅっと浣腸液が少量漏れ出た。

「嘘だろ！トイレに行かせてくれ！早く！」

直後に限界を迎えた拓弥は顔を赤らめて必死に訴える。

「ダメ！このまま出して！」

即答でダメ出しした虎次郎は、小型カメラ二台を拓弥の顔と尻に向けて三脚で固定していく。

竜太郎もビデオカメラを拓弥の顔に向けてナレーションを入れる。

「これから学園中等部二年生でバドミントン部のエース、蒼乃拓弥の公開浣腸ショーです。モザイク無しだぜ！」

そんな極悪兄弟の様子に顔色を赤から青に変えた拓弥が絶叫する。

「マジで勘弁してくれ！なんでもするから！」

拓弥の言葉に、虎次郎と竜太郎はアイコンタクトをしてほくそ笑む。そして、虎次郎が拓弥の尻をワシ掴みにしながら『提案』する。

「じゃあ性奴隷に、って言うのかわいそうだから、まずは兄ちゃんとセックスしてみてよ。拓弥の意思で『竜太郎先輩とセックスしたいです。オレのこと犯してください』ってカメラに向かって言って。したらトイレに行かせてあげる」

拓弥は一瞬息を飲んだが、すぐに叫んだ。

「竜太郎先輩とセックスしたいです。オレのこと犯してください！」



トイレには行かせてもらえませんが、結局すべてを竜太郎と虎次郎に見られて撮影もされたあげく、シャワーでアナルと腹の中を念入りに洗われた拓弥は精神的動揺を隠せず、また自ら言わされた言葉にも縛られているのか、虎次郎達に言われるがままに体を開いた。

「はい、くばあつ！」

虎次郎は四つん這いにさせた拓弥のアナルを両手の人差し指でめいっばい開いてカメラにむける。

最高画質のビデオカメラで、拓弥の綺麗なアナルとピンク色の腸壁、そしてすぐ下にぶら下がる金玉と揺れるペニスが録画されていく。

「筍学園中等部二年生、蒼乃拓弥くんのアナルです。このあとすぐ、自称筍学園で五本のペニスに入る巨根という高等部二年宗野竜太郎のペニスでアナルバージョンを喪失します。まあ自称だけど」

「自称じゃない。学園の全男子生徒の身体データを持っている筍アーツの極秘データで確認したガチなやつだ」

竜太郎は弟の煽りに余裕の表情で答えながら、ビデオカメラで拓弥の全身を舐めるように撮影していく。

「ほら、もつとちゃんとほぐせ！」

「は〜い」

緩い返事をした虎次郎は、しかし真剣な顔つきで両手十本の指を使つて丁寧に拓弥のアナルを揉み解し始めた。

拓弥自身は首まで真っ赤になって、顔を枕に沈めている。

「そろそろ大丈夫だろう」

竜太郎がそう言うのと虎次郎はすぐにアナルから手を放し、拓弥の尻を軽く叩いて体を起こさせた。

枕から顔を上げた拓弥の目の前には、いつの間にか全裸になっていた竜太郎の肉体があり、自分以上の筋肉量と自慢に違わないデカいチンポに目を見張り息を飲む。

「マジか」

竜太郎の完全勃起したズル剥けペニスは、やはり拓弥が見たことのない長さで太さだったらしく、そのまま視線が釘付けになっている。絶句している拓弥の頬に、竜太郎は突然自分の亀頭を押し付けた。

「うわっ」

圧倒的な大きさを押し付けられた拓弥の表情は恐怖に歪む。

「覚悟しな。これからコレをお前の尻の穴にぶち込む。最初は死ぬほど痛くて苦しいらしいが、必ず快感に溺れさせてやるから安心しろ」

それまでは気のいい兄ちゃんな雰囲気だった竜太郎は、一転して獲物を狩る肉食獣の雄のオーラをまき散らして拓弥を圧倒する。

「拓弥、俺の亀頭にキスしろ」

竜太郎の『命令』に拓弥は驚いた様子だったが、すぐに素直に従つて、おずおずとキスをした。

「拓弥、自分で足を開いてアナルを差し出せ」

恐怖に顔を引きつらせながらも、拓弥はM字開脚してアナルを竜太郎の巨根に向けて差し出す。

「うひい！」

竜太郎のズル剥けの亀頭が拓弥のアナルに押し付けられると、拓弥は全身をビクンと震わせて奇声を上げる。

拓弥の両足を腿裏で掴んだ竜太郎はなんの前触れもなく、いきなり亀頭を拓弥のアナルに押し込んだ！

「うおおおっ！」

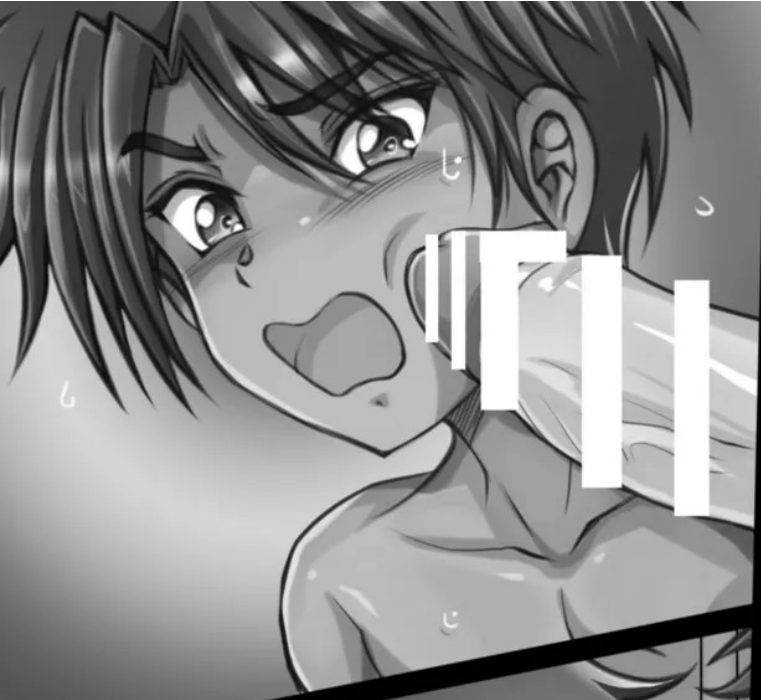
低い音程の悲鳴を上げて拓弥は悶絶し、大きく呼吸をしてシックスバックと形の良いへそが激しく上下する。

「まだ先っぼだぜ」

そう言いながら、竜太郎は一息に根元まで挿入してしまう。

「んはあつ！」

声すら出せずに拓弥はビクンビクンと痙攣した。



「拓弥、アナルバージン喪失の感想を言え」

「は、腹の中にぶつとい杭をぶち込まれたみたいっス」

竜太郎の巨根を根本まで挿入されて息も絶え絶えな拓弥はぐったりとしていて、ペニスも完全に縮みあがっていた。

「でも、すごく感触のいいアナルだ。やっぱり才能あるぜお前」

自分の巨根を飲み込んでいる拓弥の下腹を撫でながら、竜太郎は満足そうに頷いた。

「虎次郎、手伝ってやれ」

「うん！」

虎次郎の指が拓弥の左右の乳首を騷り始める。

同時に、竜太郎も根本まで挿入したペニスをゆっくりと揺さぶるように丁寧に動かしてアナルを刺激する。

さらに虎次郎は拓弥の萎えたペニスを包み込むように扱きあげて、亀頭の先や尿道口も騷っていく。

しばらくすると拓弥の乳首はツンと勃起し、ペニスもあつという間に勃起して透明な粘液をだらだらとこぼし始めた。

「あ、あんっ、うそお、ああんっ！」

乱れていた呼吸も、徐々に規則的で卑猥な嬌声を含んだ、甘くてエロイ吐息に変わっていく。

「驚いたな、思った以上に順応が早い」

素で驚く竜太郎の言葉に、拓弥の乳首を舐めながらペニスを弄っている虎次郎は、拓弥の乳首を甘噛みして金玉をコリコリと騷る。

ビクンッと跳ねる拓弥の反応を見て、竜太郎はさらに言葉を重ねる。

「拓弥、お前はやっぱり才能があるぜ。お前のカラダは男とセックスするためにあるんだ。お前のアナルは、オトコのペニスをぶち込まれて精液を注ぎ込まれるためにあるんだ！」

竜太郎の言葉に、拓弥は無言で必死に首を横に振る。

しかし、拓弥の口からは快感に耐え切れずに卑猥な甘い嬌声が呼吸

に合わせて漏れ続けている。

「虎次郎、もういいぞ」

「うん」

虎次郎が名残惜しそうに拓弥の乳首とペニスを放すと、竜太郎もペニスを拓弥のアナルから抜いた。

「ああん」

思わず不満げな嬌声をあげる拓弥のカラダをひっくり返してうつ伏せにし、尻を高く掲げさせてアナルを丸出しにした。

「そろそろ本気でいくぜ！拓弥、お前のアナルが男のチンポを入れるための穴だって認めるまで犯すから、覚悟しろ」

そう言われた拓弥は、首まで真っ赤になりながら自分でさらに尻を高く上げてアナルを晒し、アナルはパクパクと艶めかしく蠢いている。

それを見た竜太郎は生唾を飲んで舌なめずりする。

「よくできました」

そう言いながら、拓弥のくばあつと開いたアナルに竜太郎のさらに硬く屹立したズル剥け巨根が文字通り一突きで根元まで挿入された。

「んおおおん！」

枕に押し付けた拓弥の口元から絶叫のような嬌声が漏れ出て、拓弥のカラダは小刻みに震えている。

「いきなりキマったか？」

竜太郎は深く長く太いペニスをそのまま激しく出し入れしていく。ペニスがアナルを出入りする湿った卑猥な音と、拓弥の日焼けしていない丸くて引き締まった形の良い尻肉を打ち付けるパンパンという乾いた音が部屋の中に響き渡る。

それに加えて拓弥の甘くて卑猥な喘ぎ声が鳴り響いていく。

「拓弥！すぐアへ顔だぜ！認めるよ！アナルセックス最高だろ！」

そう言って虎次郎が向けたスマホに、拓弥は溶けまくったアへ顔のままはつきりと強く頷いて舌なめずりをした。



四回目のセックスは立ったまま鏡の前で。

全裸の拓弥を背後から抱きかかえた竜太郎が、拓弥のアナルにペニスを入れたまま全身を愛撫して、快感に悶える拓弥の蕩けたアへ顔と淫らな肉体を鏡に映して楽しむ趣向だ。

「お前自身が、自分がオトコに抱かれて淫らに喜んでいるのをしっかりと見て、自分が男に抱かれるためのオトコだと自覚してもらおう」

すでに、拓弥の下腹の中には三回分の竜太郎のザーメンが直接大量に注ぎ込まれていて、四回目にも関わらず硬度も大きさも変わらない竜太郎のズル剥けペニスがアナルに栓をしているのだ。

「もう、射かせてくれ！」

「まだダメだ」

実は同じやり取りを既に十回以上していた。

竜太郎は拓弥のアナルに入れたペニスで拓弥を拘束したまま、両手を使って拓弥の肉体を愛撫し続けていて、チンポはもちろん、今回急性感帯として開発された乳首のほかに、拓弥自身も知らなかった性感帯を次々と暴いて拓弥を快感で悶絶させまくっているのだ。

「それに、もうお前のミルクタンクは空っぽじゃないか？空打ちは辛いだけだぞ。快感だけ味わっている」

実際、拓弥はすでに限界を超えた回数射精をしていて、ぶらぶら揺れる勃起ペニスからは透明で粘度のひくい液体がだらだら流れ落ちるだけになっていた。

「拓弥、キスしよう」

「えっ！」

今日出会ってからいままで、実は一回もキスはしていない。

「いやか？」

拓弥は竜太郎の問いかけに無言で唇を差し出した。

「んっ」

竜太郎は愛撫の手を止めて、右手で拓弥の右胸の乳首を摘みながら

抱き寄せ、左手は拓弥の左腕を掴んで引き寄せて、勢いよく拓弥の唇を奪うと、舌を入れて激しく絡めて犯す。

「んんんっ」

長いキスをしながら竜太郎はさらに強く拓弥を抱きしめて、ふらふら揺れる拓弥のズル剥け勃起ペニスはビクンビクンと跳ねる。

「っん、んんんっ！」

そして、四回目の射精が始まって、一層深く挿入した竜太郎のズル剥けの巨根から大量の精液がまた拓弥の腸内に注ぎ込まれた。

「抜くぞ」

そう言って拓弥のアナルから引き抜かれた竜太郎のズル剥けペニスはまだほぼ硬度を保ったままだ。

次の瞬間。栓の取れた拓弥のアナルからは大量の精液が噴出して拓弥自身と背後から抱きしめたままの竜太郎の下半身を濡らしてしまう。

「ああっ、出ちまう」

そう残念そうに呟く拓弥の顔は、完全に快樂墮ちしたメス顔だ。

「期待以上に最高だったぞ拓弥」

そう言って竜太郎は改めて背後から拓弥を抱きしめる。そして拓弥の耳元で囁くように言う。

「俺達兄弟の性奴隷になってくれ。俺達の所有物になれ」

その言葉に、拓弥の勃起ペニスがポンと跳ねて頷く。

竜太郎は右手で拓弥の金玉を掴むとコリコリと潰して鬨る

「んひいイ！」

激痛に拓弥のカラダが強張るが、逃げ出そうとはしない。

「男に生まれたことを後悔するくらい激痛や、想像もできない羞恥を味わうことになるけど、大事にするから俺達のモノになれ」

酷いことを言う竜太郎に、拓弥はゆっくり頷いて、呟く。

「もう好きにしてくれ」



「みなさんお待ちせしました！筭アーツ主催、PB会員限定のペットボーイズミーティングを開会します！」

司会者のアナウンスと同時にスポットライトがステージを照らし出し、三人の逆バニー男子が現れると二十人ほどの観客は沸き上がった。

一時ネットで話題になった逆バニー。通常のバニーガールとは衣装の部位が反転していて、両手両足は隠し、股間を含め胴体は丸裸という衣装にうさ耳カチューシャという衣装を着た筋肉少年が三人、ステージに立っているのだ。

当然、三人ともチンポが丸出しだ。

「性奴隷契約を結んだ男の子とご主人様のためのPB会、おかげさまで順調に会員様が増えております。恒例の懇親会である今回のミーティングでは新規会員の性奴隷三人に、ご紹介も兼ねてステージでのショーをお願いします」

司会者の合図で、拓弥は前に出てステージの中央で仁王立ちになる。形の良い大胸筋とシックスパック、そして通常状態のほぼ剥けチンポを堂々と晒したまま軽く一礼した。

「一人目は、宗野竜太郎さんと虎次郎さん兄弟の性奴隷で、蒼乃拓弥くん中学二年生です。ご主人様も高校二年生と小学六年生です。ご奉仕は基本週二回、セックスとSMのフルコースを楽しまれています。まだ契約して間がないため、毎回新しい挑戦をしています」

紹介が終わると拓弥は客席に尻を向け、ウサギのしっぽをアナルから抜いて尻を突き出し、アナルを客席に晒した。

拓弥の綺麗なアナルに観客は歓声を上げる。

拓弥は首まで真っ赤になっているが、客席では竜太郎と虎次郎が満げに頷いている。もちろん二人の指示なのだ。

続いてズル剥けチンポを勃起させているイケメン君が前に出た。

拓弥に引けを取らない見事な褐色の肉体の少年で、拓弥とはタイプの違う優しい顔の美少年だ。

さらにもう一人の色白の筋肉男子も前にでた。顔は拓弥や郁也ほどのイケメンではないが、肉体は二人に勝る完成度の少年だ。

ただし、他の二人と違ってトレーでチンポを隠したままだ。

「二人目、そして三人目は、宗野瞬太さんと沢崎史尋さんの性奴隷で、椎名郁也くん中学二年生と、天野鷹介くん中学二年生です。ご主人様は二人とも小学六年生です。蛇足ですが宗野瞬太さんは、先程の宗野御兄弟の親戚だそうです。ご奉仕は郁也くんが週二回で主に史尋さんとセックスとSMを交互に楽しませているそうです」

郁也はおもむろに自分の勃起しているペニスを抜き始め、観客に向かって口を開いた。

「椎名郁也です。ご主人様の命令で皆さんに射精を見ていただきたいと思えます。よろしくお願いします」

観客の歓声が終わらないうちに、郁也のズル剥けペニスから勢いよく精液が噴出してステージに飛び散る。

観客の拍手が鳴りやむのを待って、司会者は紹介を再開する。

「続いて天野鷹介くんのご奉仕は、主に瞬太さんと毎日セックスとSMをランダムに楽しんでいるそうです。毎日は凄いですね！そして今日のご挨拶もスゴイです」

司会者のフリで、鷹介も前に出てトレーを外してチンポを晒す。すると観客は歓声で騒然となる。

鷹介の完全勃起したズル剥けペニスと、重りで縊りだした金玉の両方に大量の爆竹が巻き付けてあるのだ。

鷹介は自分で爆竹の導火線に火をつけると観客に向かって口を開く。「天野鷹介です。ご主人様の命令でチンポ爆破を御覧いただけます。爆破後に勃起したままです」

鷹介はチンポを観客に突きだして両腕を頭の後ろで組む。それから数秒後に爆竹が一斉に爆発し、白い煙の中からズル剥け勃

起ペニスが現れた瞬間、熱い拍手が沸き起こった。



「では続いては、郁也くんと拓弥くんによるジュース運び競争です！」
司会者のコールでステージに現れた二人に観客は大いに沸いた。

逆バニー衣装のまま、拓弥と郁也は肩を組んでカラダを密着させていて、片方の乳首同士を密着させて絡ませ、もう片方の乳首同士は金属製のニプルクラッシュャーを装着して電線で繋いである。

そして、股間ではズル剥け勃起ペニスを兜合わせにして、それを有刺鉄線で括ってあり、それぞれのペニスと陰囊の根本を金属リングで戒めてあるのだ。

さらにそれらチンポの金属と乳首を繋ぐ電線が接続していて、二人の金玉にぶら下がっている重そうなバッテリーに繋がっていた。

そんな不自由な体勢で、二人ともジュースのグラス二つをトレーに乗せて持たされている。

「これから二人には。ステージの端から端までジュースを届けてもらいます。もちろん、ぶら下がっているバッテリーはただの重りではありません。観客の皆さんが持っているリモコンでランダムに電撃を発生させるようになっていきます」

司会者は小さなリモコンを掲げて見せる。

「ちよつと押してみましようか？」

悪戯っぽく笑った司会者がリモコンのスイッチを押した瞬間！

「ぎゃっ！」

拓弥と郁也が同時に悲鳴を上げて飛び上がった。

「おっと、いきなり当たりですね。拓弥くん、ぶっちゃけ今どうなったのか詳しく説明してください」

突然の無茶ぶりに拓弥は慌てるが、なんとか口を開く。

「電撃が金玉とペニス、それと乳首に同時に襲ってきて、でも痛みレベルがバラバラだから、めっちゃ混乱します」

拓弥の言葉に、郁也も強く頷く。

「なるほど！ただ痛いだけじゃないんですね！」

司会者は大きなアクションで話を引き取り、さっそくゲームをスタートさせる。

「ルールは簡単！スタートからゴールまで、無事にジュースを届けることです。どこまでを無事と認めるかですが、まあ、コップが一つでも残っていたらセーフにしましょう。スタートと同時に皆さんもスイッチを押しまくってくださいね！では、よいスタート！」

合図に合わせて拓弥と郁也はゆっくりとスタートするが、直後から電撃が絶え間なく襲ってきて、しかもお互いに相手の動きに影響されるために動きはガタガタになってコップの中身がこぼれまくる。

「うぎゃっ」

「あひい」

奇声を発しながら滑稽な身動きでギクシヤク進む拓弥と郁也を観客は楽しく囃し立てているが、さらに司会者はネタを放り込んでくる。

「ところで郁也くん、いままでが一番辛かったSMプレイは何かな？」
あまりに乱暴な突然の無茶ぶりだが、電撃の苦痛に四苦八苦しているはずの郁也は即答する。

「金玉相撲です！相手があつて加減が上手くいかないのです、マジで金玉取れるんじゃないかと思いました！」

観客は予想外の答えに大いに沸いた。

「では、拓弥くんはどうですか？」

郁也があまりに早く答えたせいで、結局準備ができなかったらしい拓弥は一瞬言葉に詰まるが、顔を赤くして答える。

「ホテルの廊下に全裸で放り出されたこと！そのせいで鬼と悪魔に捕まって、いまココにいる！」

これには鬼と悪魔本人が爆笑し、事情を察した他の客もいい感じに沸いたところで、ようやくゴールにたどり着く。

「はい、ゴール！うん、結局コップの中身は全部無くなっちゃったから二人とも失敗です！」



司会者はそう言うで一呼吸おいてから付け加える。
「それと、言い忘れましたが、失敗したら罰ゲームです！」

郁也の罰ゲームはなんと『金玉相撲』！

しかも、対戦相手は因縁のライバル、天野鷹介！

鷹介は特に罰ゲームは必要なかったのだが、連帯責任という悪習を持ち出して一緒に処刑されることになったのだ。

前回よりも長く過酷な戦いになった金玉相撲の勝敗は、郁也が雪辱を果たして勝利！

「続いで罰ゲームは拓弥くんです！準備が整うまでお待ちください」

拓弥の罰ゲームは『アナルクレーンゲーム』というアトラクションで、全裸で吊るされた性奴隷が、ご主人様の操作で床に固定された極太デイルド上に下ろされてアナルを犯されるといふものだ。

全裸にレザーの首輪だけを着けた拓弥は、縄で亀甲縛りにされて吊るされ、両腕は頭の後ろで縛られて、右足は膝で折り曲げて拘束され、左足はまっすぐ上に伸ばして拘束されている。

「似合っているぜ、拓弥」

虎次郎はすっかりご満悦で、拓弥のペニスを扱いて勃起させていく。
「せっかくだから、こっちも飾ろうぜ！」

そう言ってプラスチック素材のリングでペニスの根本を締め付け、もう一つのリングで陰囊の根本を締め付けて金玉を縊りだす。

「くっああっ」

さらに完全勃起したズル剥けペニスには太めの金属製尿道プラグを情け容赦なく奥まで挿し込んでしまう。

「ぐあああああっ！」

「うん、いい感じ！たまらないね」

器具で『飾った』拓弥のペニスと金玉を見て虎次郎は何度も満足げ

に頷くと、おもむろに金玉をサンドバックのように殴りだす。

「ぎゃあああっ！」

けっして強いパンチでは無いが、身動きのとれない拓弥は無防備に晒した金玉を文字通りサンドバックにされて悶絶する。

「お楽しみのところ申し訳ありませんが、そろそろお願ひします」

「あっ！ごめんなさい。つい楽しくって夢中になっちゃった！」
苦笑気味の司会者に促されて、虎次郎は慌てて配置についた。

「それでは拓弥くんの罰ゲーム開始です！」

虎次郎は可動式の滑車を縄で器用に操って、拓弥をスルスルとステージ上を移動させていく。

目的の極太デイルドはステージの真ん中であって、太さと長さも極悪だが、大量の突起物が生えた造形はグロテスクでさえある。

しかも、実は拓弥はまだそのデイルドを見ていないのだ。

「おいっちよつと！なんだよアレ！無理だつて！」

ようやく極太デイルドを見た拓弥は青くなって抗議するが、それも観客にはお約束の見世物だ。

「じゃあ、お客さんにアナルを解してもらおう」

お約束を教えられている虎次郎は、縄を操って拓弥をステージの端っこに移動させて、観客から拓弥のアナルに手が届くようにする。

「ひいああ？」

突然アナルに様々な人の手や物が入ってきて、その違和感に拓弥は身悶えるが、単に悪戯されただけで特に解して貰えたわけではない。

「じゃあ、もういいかな、拓弥、イッて来い！」

虎次郎の操作で極太デイルドの真上に移動した拓弥は、何回か失敗を繰り返した後に、アナルにデイルドがハマってストンと落とされた。

「うがあああああっ！」



「拓弥、そろそろ起きてよ」
虎次郎にべちべちと頬を叩かれた拓弥は、ゆっくりと目を開けた。
一呼吸置いてから一気に覚醒して起き上がろうとするが、両腕を拘束されていて身動きがとれない。

「ええ？あれ？なんだ？」

まだ状況が飲み込めない拓弥に、虎次郎がいかつまんで説明する。

「拓弥は罰ゲームで失神しちゃったんだ。で、その間にこの台に寝かせて拘束しちゃった」

本当にかいつまんでなので、拓弥はやっぱり状況がわからない。

「お前、いやご主人サマはなんで全裸なんだ？」

拓弥はステージ上に置かれた平台に全裸のまま仰向けで大の字に寝かされ、膝から下は平台の外に落ちていて、その拓弥の腹の上に全裸の虎次郎が座っていた。

自分の腹筋に密着している虎次郎の尻肉と金玉の感触に、拓弥はようやく気が付いたのだ、

「もうちよつと丁寧の説明してやれよ」

観客席の竜太郎からヤジが飛ぶ。

そのヤジで、拓弥は観客に見られていることに気づいたようだ。

「ご主人サマまで全裸でステージに上がっている？」

「うん、それ自体は結構あることらしいよ？このPB会自体が自分の性奴隷を皆に自慢したい、という趣旨の集まりだから」

そう言いながら、虎次郎は拓弥の乳首や大胸筋、そして六つに割れた腹筋を撫でまわしていく。

「それでさ、せっかくだから拓弥の筆おろしと、おれのアナルバージョン喪失を見せびらかそうと思って」

拓弥のへそのゴマを弄りながら、虎次郎はペロっと舌を出す。

その言葉の意味を理解するのに時間がかかったらしい拓弥は、たっぷり間を開けてから、叫んだ。

「つてマジか！人前でセックスするってことか？」
「そういうこと！」

あつさり認めて笑う虎次郎に拓弥は絶句する。

そんな拓弥に虎次郎の方が不思議そうに首を傾げる。

「あれだけ痴態を晒しておいて今更じゃない？」

「いや、チンポで遊ぶのとセックスは別だろう！」

意外と固い考えの拓弥に虎次郎は驚いているが、明らかに面白がって何かのスイッチが入ったようだ。

「つべこべ言わずにチンポ勃起させろ！これからレイプしてやる！」

楽しそうにそう言うと、虎次郎は拓弥の腹に座ったまま後ろ手で拓弥のチンポを抜き始める。

「つていうかお前は、ご主人サマはいいのかよ、オレのチンポで！アナルは初めてなんだろう？」

なぜか焦っている拓弥を面白そうに見ながら虎次郎は観客にも聞こえるようにハッキリ言う。

「もちろん！おれの初恋のヒトだからね、拓弥は」

また、たっぷり間を開けてから拓弥は叫ぶ。

「ええええええ？」

「まあ、あの兄ちゃんの弟なんで、スキだからこそ、めいっばい痛めつけちゃう感じで、さっきはやり過ぎました。ごめんね」

ペコリと頭を下げる虎次郎に呆然とする拓弥に構わず、虎次郎の手は拓弥のチンポを抜き続けて完全勃起させた。

「じゃあお客さん！小学六年生の宗野虎次郎、中学二年生の蒼乃拓弥を、逆レイプします！よく見てね！」

虎次郎のアナルが、屹立する拓弥のズル剥けペニスに乗って、そのまま一気に飲み込んだ！

「ああああんっ！」

虎次郎は歓喜に満ちた笑顔で拓弥を見下ろした。



「よし映像出た！」

全裸に革の首輪だけという姿でフロアリングの床に正座する拓弥の背後に置かれた二台の大型のモニターの、向かって右のモニターには椎名郁也が、向かって左のモニターには天野鷹介が、それぞれ全裸で正座して映し出されていた。

「瞬太、史尋、聞こえてる？見えてる？」

虎次郎の呼びかけに、スピーカーから『聞こえてるし見えてるよ』という返事が流れてくる。

「じゃあ、始めよう！アレ出して」

虎次郎がそう呼びかけると、竜太郎がボールクラッシュヤーを拓弥に手渡し、それとほぼ同時にモニターの中でも郁也と鷹介に同じものが手渡された。

「拓弥、自分で金玉挟んで」

ご主人サマの虎次郎に命令されて、拓弥はボールクラッシュヤーを自分の金玉に装着する。

モニターの向こうでも、それぞれご主人サマに命令されて同じようにボールクラッシュヤーを金玉に自ら装着している。

「それでは、第一回リモートSMプレイの実験を始めます。将来的には自宅にいる性奴隷に命令して、自分で自分を痛めつける様子をリモートでご主人様が楽しむような使い方もしたいと思いますが、今回はみんなで競争させるプレイを試します」

虎次郎はそこまで言うときマイクを竜太郎に渡す。

「ボールクラッシュヤー開始！一番狭くした奴が優勝で、一番できなかった奴が罰ゲームだ！」

竜太郎の掛け声で三人は一斉にボールクラッシュヤーのネジを回し始めるが、拓弥と郁也はすぐに手が止まってしまふ。

鷹介だけはクルクルと回してあつという間に自分の金玉を驚異的な数字まで潰して平然としていた。

拓弥と郁也は涙を流しながら必死に頑張っているが、鷹介には遠く及ばないレベルで留まっている。

「やっぱり鷹介くんはレベルが違うなあ」

素直に感嘆している虎次郎を、マイク越しに瞬太が『でしょ！オレが毎日鬨ってるからね！オレの鷹介が一番！』と煽ってくる。

煽られた虎次郎は拓弥に向かって言い放つ！

「拓弥！鷹介くんに負けたらチンポ爆破ね！」

モニター越しに郁也にも史尋から爆破通告がされているようだ。

そして、拓弥と郁也が同時に叫ぶ。

「ムチャ言うなああ！」

おしまい





みなさんお久しぶりです！お元気ですか？
イラスト担当の筍屋です
言わずもがなですが今年はコロに振り回され
せっかく当選したGWコミケ中止などもあり
同人活動も停滞状態となっております
この本は3月頃 コミケ合わせで開始したものの
肝心のエアコミケには全く間に合わず
5月中には通販で という目論見も叶わず
伸びに伸びて今回やっと発行の運びとなりました
リアルの方もコロ不景気や自粛で暇なのですが
時間があっても原稿はすすまないんだなこれがw
人は時間制限が無いと前に進まないというの
けだし名言だと思えますねえ
という事で5ヶ月も掛かってこの薄さですが
どれか一枚でもお気に入りの絵がありましたら
イラスト担当として幸甚であります
早くコロが終息し普通にイベントが
開かれる事を祈りたいと思います

2020年8月16日

筍屋 takenokoya@yahoo.co.jp

竹藪館 <http://www.hi-ho.ne.jp/su-oh/keikoku.htm>

(御意見 御感想ありましたら宜しくお願いします)

はじめまして&おひさしぶりです。

へたれ文字書きのた〜んけーです m(_ _)m

まさかこんな夏になるとは。

読み専も含め年数だけは結構長く同人活動していますが、
ここまでの深刻な危機はさすがに経験がありません。
自分たちに出来る範囲で、とにかく一歩でも前に踏み出す。
そのために薄いながらもまずは一冊。

内容は筋肉少年を鬪ってるだけだけどね！（いつも通り）
どこか一場面でも、皆さんの琴線に触れられたら幸いです。

2020年8月 た〜んけー

turn_k_vf@yahoo.co.jp

補姦少年 Special Mission

2020年8月16日 初版発行

発行/筍御飯VF

著者/筍屋&た〜んけー

印刷所/株式会社 プロス

連絡先/turn_k_vf@yahoo.co.jp



成人向
FOR ADULT ONLY